に成りておのが手の置場も無く唯恥かしさ面おほはれたり。猶の給はく、よりて吾れ一法を案ぜり、そは外ならず、余は君を目して我が舊來の親友同輩の青年と見なして萬の談合を爲すべければ君は又余を見るに青年の男子なりとせで、同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり』

その時半井氏は一葉の家の貧困であるのに同情して、いろ〳〵親切に話をした。半井氏自身の來歴をも語つた。一葉は、その日の記を『師がの給ふ所をきけば、吾が家の貧しきは未だ貧しとすべきにもあらず、君の經來り給ひけんこそ中々にまさり給へれとぞ覺ゆる』といふ言葉で終はつて居る。

半井氏對一葉の交際に就ては、世間で種々の臆測があるやうだから、以下、日記のなかから、半井氏に關する分だけを大凡拾つて見よう。

中

五月の八日には、一葉は桃水氏の宅で、小宮山卽眞居士に紹介された。同十五日には、半井氏の轉居した麴町平河町の宅を訪ひ、廿七日には、小說の原稿を携さへて再び半井氏を訪ふて居る。六月三日と同十七日に又半井氏を訪ふた。日記は六月の二十三日から七月の十七日までと八月の十一日から九月の十五日までとが缺けてゐる。九月二十六日の所に、斯う書いてある。『國子（一葉の妹）……半井うしのことなどをも聞て來ぬ。いでや猶記者は記者也、朱にまじはるになど色赤うならせ給はざらん、品行のふの字なること信用のなし難きことも姉君が覺す樣には侍らずとよとてまめだちて聞えしらさるゝに胸つぶれぬ。我爲には良師にしてかつ信友と君もの給へり、我が一家の秘事をも打明て頼み參らせ後來扶けにならんなどの約も有しをそも僞りなりけんかしらず、誰が誠をかとて打もなげかれぬ』

十月十八日の所には、一葉を半井氏に紹介した野々宮菊子が來て『一昨日より半井君のもとに遊びてよべ歸りぬ、夏子ぬしはいかゞし給ひしやなどといとう打案じての給へりし、參らせ給へよ』と云つた。一葉は之に答へて『みにもかねてより參り寄らまほしく思ひながら、猶なんさはる事ありて、まかでぬを常に心ぐるしくてのみなんある』と云つた。同二十四日の所には『半井孝子（桃水氏の令妹）ぬしが嫁入り給ふいはひもの少しもて行方よろしからめとてなり。さわ明日早朝にと心がまへす。久しく訪ひ奉らざりしうちにさま〴〵あやしきもの語りとも多かるを半井君のそをおのれにつゝまんとて苦心し給ふなど聞にも少しほゝゑまれぬ』と書いてある。二十五日には祝物を持つて行つたまゝで上らずに歸つた。三十日の所には、

『半井君を訪ふ。……種々込み入りたる話しもあれば、此頃もとめし隱れ家にとの給ふ、伴はれて一丁斗手前なるとあるうら屋に參る。座敷の間數四つ斗あり云々』

とあつて半井氏の話は、

『……君がかく打絶て訪はせ給はぬなん我身に何事か有たる樣にさかしらする人や侍りけん、身はしら雪の清きをもてうたがはれ奉るなんいと心ぐるしう、かつは君が中頃より打絶させ給ひしを小宮山などあやしがりて某に猶曲事ある樣になん思はるゝもつらし、依ていかで君に以前のごと訪はせ給はらん事をとていといひにくかりしかども野々宮ぬしに委しく語りまつれるにこそ、……兄弟中の醜聞より御母君などあやふがりてかく引止め給ふにや、其心配なう參らせ給はゞ嬉しからんなどの給ふ』

と書いて、その次に『おのれはさる心にもあらざりしかど笹原はしるみ心なめりかし』と、一葉の評語が加へてある。十一月二十四日に一葉は、桃水氏を隱れ家に訪ふた。二十五年の一月七日に、一葉は半井氏の所へ年始に行つたが、本宅には貸し家札が貼つてあつて、半井氏に用のある人は、其近邊の小田（をだ）といふ家で問ひ合はせろといふ貼紙があつた。で小田へ行つて聞くと、唯だ地方へ旅行したとばかりで要領を得無かつた。何うも例の隱れ家にでは無いかと、それへ行つて音なつたが、留守のやうであつた。水口の戸の開いて居る所から、家のうちへ入つて見たが、誰も居無かつたので、土產物を板の間に置て歸つた。同十一日には、旅行では無くつて隱れ家に居るのだといふ、半井氏の端書が一葉の所へとどいた。二月の三日の所に、『半井うしへはがきを出す、明日參らんとてなり、しばらくにしてうしよりもはがき來る、明日拜顏し度し來駕給はるまじきやとの文躰なり、こはおのれが出したるに先立てさし出したまへるなるべし、かく迄も心合ふことのあやしさよとて一笑す』とある。翌四日には、雪を冒して半井氏を訪ふたが、桃水氏は、まだ眠てゐた。一葉は次の間で、十二時少し過ぎから一時頃まで待つてゐた。半井氏は起きて、雜誌『武藏野』の發行さるゝことを話して、一葉の作を求めた。半井氏手づからしるこを作つて一葉に饗した。四時頃車で送られて九段へと堀端を通つた。『雪の日といふ小說編まばやの腹稿なる』と書いてある。

二月十五日には一葉『武藏野』の原稿――『闇櫻』――を半井氏のもとに持つて行つた。三月七日半井氏を訪ふて『武藏野』同人の意氣壯なことを聞き、『闇櫻』の好評なるよしを聞いた。十八日半井氏初めて一葉を訪ふて、西片町へ轉居の通知をした。二十一日一葉半井氏を訪ふて、自分は實際小說家になれる見込があるだらうか、直言して呉れと、賴んでゐる。半井氏は一葉の生計上に困難なことがあらば應分の助力はするから、何處までも小說を書いて見ろといふやうな意味で答へてゐる。二

十三日半井氏を訪ふと、『武藏野』の表題を書て呉れと頼まれてそれを書いた。二十四日一葉半井氏を訪ふて、生活上の補助を依頼したが、半井氏は月末までには必らずと快諾した。廿六日半井氏から宜いことがあるから來いといふ使が來たので、翌廿七日半井氏を訪ふと、一葉の別著の小說――『別れ霜』――を改進新聞に載せることにしたからといふ話であつた。再訂の必要があると云つて、一葉は原稿を持ち歸つて、其後の數日努力した。廿九日の所には『むさし野廣告出たり何と無く極り惡るし』と書いてあり二三行後に『一日分丈草す（新聞原稿）半井氏のもとへ持參せしは十時なりし、今夜も國子同道』とある。四月六日の記事のあとに、歌が四五首書いてある『みちのくのなき名とりがはくるしきは人ぞきせたるぬれ衣にして』『散ぬればいろなきものを櫻花こひとは何のすがたなるらん』『ゆく水のうきなも何か木の葉舟ながるゝまゝにまかせてぞみん』外二首だ。四月の日記の卷の首に『かまへて人にみすべきものならねど、立かへり我むかしを思ふにあやふくも又ものぐるほしきことといと多なる、あやしうも人みなば狂人の所爲とやいふらむ』とある。これは後から書いたものかも知れ無い。四月十八日の所に『午前のうちに片町の大人がり行く、此の日頃惱やみ給ふ所おはす上に何事にやあらむ立腹の氣にてはかゝ〳〵敷は物語も賜はらぬなむ心ぐるしければ、いでや今日こそは御心取らんとて出たつ』とある。廿一日の所には『午後より大人のもとを訪ふ、むさし野來月分趣向につきてなりけり、畑島君も參り合はされたり……、大人達の趣向の談合いとをもしろし』とある。三十日桃水氏を訪ふてゐるが、半井氏は痔を切斷して病臥してゐた。五月一日、四日、九日、十九日、二十日半井氏を訪ふてゐる。多くは病氣見舞の爲であつた。廿二日の所には『半井うしの性情人物などを聞くに、俄に交際をさへ斷りたくなりぬるものから、今はた病ひにくるしみ給ふ折からといひ、いづこへぞかく斯ることといひもて行かるべき、快方を待てと心に思ふ。……午後より又半井氏病氣を訪ふ、朝鮮より友人兩三名來たりしとかにて此邊亂雜也けり、おのれ行きたる故にや人々は早かへりぬ。其のこと由謂なきにもあらじ』とある。

下

六月七日一葉は島田にゆつて半井氏を訪ふた。『人々めづらしがる。是よりは常にかくておはせよかし、いとよく似合ひ給ふをなどいはれて中々に恥づかし』とあつて、半井氏の言葉を斯う書いてある。『實は君が小說のことよ、さま〴〵に案じもしつるが、到底繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやう〳〵に見付けて尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて讀賣などにも筆とられなばとく多かるべし……されど、それも是も我は日かげの身立出て何事かなし得べき、委細畑島に

いとよくたのみてそれが知人より頼み込せしなり、此二日三日のほどに君一度紅葉に逢ひては見給はずや……との給ふ、何事のいなかあるべき、いと辱なしといふ』とある。一葉は其足で直ぐ、中島家へ行つた。中島家の老人の祭典で、人が十四五人居たが、一葉の信友伊東夏子が一葉を別室へ呼んで家の名が惜しくば半井氏と絶交せよと勸告した。十四日の所が面白い。

『我不圖師の君の前にいざり出ぬ。……聞き參らせ度きことゞもあり……といふに、師の君やをら座を定めて何事の問ぞ、今宵聞かんとの給ふ、半井うしのことはかねて師にも聞かせまつりて、……我心に憚かる處いさゝかもあらず、先かく〳〵しかく〳〵に人の申すなむ……或は半井のことに依りてにや侍らん、もとより……我より願ひての交際にもあらず、家の爲身のすぎわひの爲取る筆の力にとこそたのめ、外に何のこともあるならず、さるをか樣に人ごとなどのしげく成るなんいと心苦し、哀師の君の御考案はいかにぞや、……御敎へ給はらまほしといふ、師の君不審氣に我をまもりて、偖は半井といふ人とそもじいまだ行末の約束など契りたるにては無きやとの給ふ。こは何事ぞ行末の約はさて置て我聊かもさる心あるならず、師の君までまさなき事の給ふ哉と口惑しきまゝに打恨めば、夫は實か〳〵、眞實約束も何もきらぬかと問ひ給ふも悲しく、我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふぞ恨めしく、人目なくば聲立てゝも泣かまほし、師の君さての給ふ、實はその半井といふ人君のことを世に公けに妻也といひふらすよしさる人より我も聞ぬ、……もし全く其事なきならば交際せぬ方宜かるべしとの給ふに、我一度はあきれもしつ、一度は驚きもしつ、……ひたすら彼の人にく〳〵つらく……猶よく聞き參らせば、田邊君、田中君なども此事を折々にかたりて……才の際なども高しともなき人なるに、夏子ぬしが行末よいと氣の毒なるものなれなど云ひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどうき名立に立たるなりとか、淺ましとも淺まし、明日はとく行て半井へ斷りの手段に及ぶべしなど、師君にも語る、臥床に入れどなどかは寢られん』

とあるのだ。十五日に一葉は半井氏を訪ふた。

『我師の君より敎えられつる樣にことつくろひてもの語りす、師の君のもとに家のうち取まかなふ人なく我行き居らではもの毎に不都合也とて……今しばらくは手傳ひ居らんとす、さすれば……紅葉君のことも何も先へ寄りの事ならずば……其甲斐あるまじく……この事申さんとて今日はいさゝかのひまもとめて參りつるなり』

と云つて、小說修業中止のむねを半井氏に告げた。廿二日まで、中島家に泊つて居たが廿二日に家に

歸つて、半井氏から借りて居た本を返しかた〴〵半井氏を訪ふて一葉は實際の事情を打ち明した。半井氏の言葉は、

『必竟は我罪かも知れず、先頃野々宮ぬしに物がたりの時いはねばよかりしものを我思ふことつゝみ兼ねて、お前様のことしきりにたゝえつ、……よき聟君のお世話したし、我れ何ともして我家を出ることめたふ身ならばお嫌やかしらずしゐても貰ひていたゞき度ものよなど我實はいひたり、夫や是れや取りあつめて世にさま〴〵にいひふらすなるべし』

と書いてある。記事の終りは、

『此人の心かねてより知らぬにもあらねばか様のこと引出しつる憎くさ限りなけれど又世にさまざまに云ひふらしたる友の心もいかにぞや……あれと是れとを比べて見るに、其の僞りに曲てなけれど、猶目の前に心は引かれて、此人のいふこと〴〵に哀に悲しく涙さへこぼれぬ、我ながら心よはしや、かゝるほどに國子迎ひに來る、家にても聊かは疑ひなどするにやあらむ。打ちつれて歸る』

となつてゐる。廿六日

『國子の物がたりに聞けば、廿三日に半井ぬし宅前まで參られし由、折ふし來客ありしかば憚かりてにや立寄りもせで行かれたるなり』

とある。二十三日には一葉まだ中島家に居たのだ。七月十日

『中元として半井ぬしを訪ふ、君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る』

とある。それからは、時々半井氏を對象にしたやうな述懐の歌だの感想が書いてあるのみで、半井氏に逢つた記事は無い。十一月十三日には、其月の二十日に『うもれ木』が田邊龍子君の紹介で雜誌『都の花』に出る筈になつてゐたので、半井氏に一應挨拶に行かなければ悪るからうといふ母の意見に、一葉は喜んで、半井氏の出してゐた葉茶屋――三崎町（みさきちやう）――を訪ふた。

『六疊ばかりの處に机おきてゆたかに大人は寄りかゝり居たまへり、ふとあふげばものいはず打笑み給へる嬉しなどはよのつねたゞ胸のみおどりぬ』

『商ひのいと忙はしくして大人のしばしも落付給ふいとまなく立働らきおはすさま何とはなくかなし、ありし病ひの後はいといたうやせてさしも見あぐるやうなりし人の細々となりぬるに、出入りにつけてものはかなきみづしめ様のものにさへ客といへばかしら下げ給ふことのいたましき、これをなりはひとすれば身にはつらしとも覺さざめるを見る目はいと佗し』

『人無きを見てつと御身近くさし寄りつゝ、何は置て御目に懸る事のいとはるかなるが口惜うこ

そ、何事も浮世に申合す人無きやうにて心細さ堪へ難しと云へば……もしこゝに申すことありと思さば、此うら道のいと淋しく人目といふものふつにあらねば此處より立寄り給はんに誰かは見とがめ申べきとさゝやき給ふ、いでや其忍びたるたぐひを厭へばこそ……と云はまほしけれど申さず來りぬ、何も何も殘したるやうにて別れぬるなり』

などゝある。十二月七日の所には、半井氏から、小説『胡沙吹く風』の序歌を求めた。直にかへし認めて、『歌は一首、よからねども林正元（小説の主人公）をよめるなりけり、かゝる折ふしの音づれいと嬉し』とある。八日『龍田君來給へり……ゆかりある人と思へば何方か憎くかるべき、歸らんといふに、母君菓子をつゝみて兄君にみやげにと出す、龍田君よりは我がよろこばしさ上もなかりき』とある。三十一日『三崎町に半井君の店先を眺めぬ、年わかき女の美しく髪などもかざりて下女には有るまじき振舞は大方大人が妻君なるべしと國子のかたる』とある。二十六年二月十一日『國子と共に九段に遊ぶ、夜くらくして風あらく三崎町あたりは家々戸をおろしいと淋し、半井ぬしのもとには龍田君斗みえしと國子の語る』とあつて『みるめなきうらみはおきてよる波のたゞこゝよりぞたちかへらまし』といふ歌がある。二月二十三日の夜半半氏は『胡沙吹く風』を贈る爲に一葉を訪ふた。

『半井に候へ夜に入りて無禮なれどゝいふに、其人なりと聞くまゝに胸はたゞ大波のうつらん樣になりて思ひかけず唯夢とのみあきれけり……何事も靄の中にさまよふ樣なり、明ぬれど暮ぬれど嬉しきにも悲しきにも露わすれたるひま無く夢うつゝ身をはなれぬ人の……せめては文にても見まほしきをなど人にいはれぬ物をおもへば幾度かどに出で立ちつくし、あらぬ郵便にたばかられて心恥かしかりしも一度二度ならず、いふべき事も覺えず、問ふべき事も忘れて面ほてりのみいと堪へがたし。……ともし火のかげよりかすかに面を仰げば優然としてうち笑みたる面さし、まことに林正元今こゝに出現したらん樣なり、我が小説『曉月夜』いつのほどにか見給ひけん、こまやかに物がたらる、猶折ふし目とゞめ給ふらん嬉しさいとかなし、……さらばと立つを止め參らせんも中々にて送り出るほどかなしともかなし、嬉しとも憂しともいはんかたぞなき、夢うつゝとも得こそ分たねばいはまほしき事も何もたゞひたすらにものも覺えず』

とあるのだ。此邊には大分文學が入つてゐるやうだ。『胡沙吹く風』に就ては、

『この小説うき世の捨て物にて……もよし、我がため生粹の友これを措て外に何かはあらん、孤燈かげはほそく暗雨まどを打つの夜人しらぬおもひをこまやかに語りてはゞかる所なく、なげきもし悅びもせんはうつせみの世にもとめて得がたき所ぞかし、此夜此書をひもといて曉の鐘ひとり聞けり、引とめん袖ならなくに曉の別れかなしく物をこそ思へ、晝はしばし別れんにこそ』

と書いてある。三月十二日

『わが家は細道一つ隔て上通りの商人どもの勝手とむかひ合ひ居たり、國子耳をとどむれば、かの大人があたりのことにぞ似たる、主人めきたる人二人三人あればいづれが主人なるや分らねど、色しろくたけ高やかなる人のものいひ少しあがりたるは大方この人主なるべし、奥方や、何や知らず面さしなどさしても美事ならぬがものを買ふとていとたかしなど小言云ひつるに、さなまが〳〵しく商人なしかりそとて、其のまゝの價ひに買とりくれたるはわかりし人なりし、家は三崎町の外れにて店がまへ立派なる葉茶屋なりと云ひ居たるよし、かの大人に違ひはあらじなど國子かたるに、忘れぬものを又さらに思ひ出ていと堪がたし。くれ竹のよも君しらじ吹く風のそよぐにつけてさわぐ心は』

それからその直ぐ後に、

『とある夕べ鐘の音を聞きて、まちぬべきものともしらぬ中空になど夕ぐれのかねの淋しき』とある。十五日の末に『入る日の方を眺むれば、かの大人のあたりそこと忍ばれて、うら山し夕ぐれ響く鐘の音の至らぬ方もあらじとおもへば』とある。

今原稿が手許に無いから確には云へ無いが、一葉と半井氏との交通は二十六年三月以後は殆ど絶えてしまつたと云つて宜いやうであつたと思ふ。唯、二十九年になつて、半井氏が齋藤綠雨が一葉を訪ひだしたと聞いて、『綠雨といふ男は油斷のならぬ奴だから』といふ警戒を與へに一葉の所へ行つたことが、日記に出て居るのみだ。一葉は半井氏の意外にふけたのに驚いてゐるやうに書いてあつたと思ふ。

世に傳はつて居る一葉對半井氏の關係は、日記に表はれた所では、上來記する通りだ。一葉の方にも隨分誤解があらうから、一葉が書いたそのまゝの言語態度で實際半井氏があられたことだか俄には斷ぜられ無い。唯だ此事件は日記のなかの一番艶のある部分のやうに思はれるので、ついながら〳〵と書いて了つた。

一葉とのみ云つて何の敬稱をも付けぬのは、文字の節約に外らぬ。他意は無い。

少し與太のやうだ

一

山崎青雨といふ方の『半井桃水君の死』のなかの樋口一葉に關する記述には、甚だ怪訝に堪へぬふしゝがある。

一葉女史の樋口夏子を初めて冊子『武藏野』に紹介したのも君（半井氏）であつた。改進新聞に其作を紹介して近代稀に見る女流作家であると折紙をつけたのも全く君であつた。一葉が君を德として常に其寓居を訪れて敎を乞うてゐたのも蓋し當然の成行であつたに違ひない。

常ににに〇〇をつけたのは僕なんだが、此の『常に』が不審なんだ。何うもこれで見ると、一葉が一生半井氏の敎を乞うたやうに聞える。つまり、その點が僕には不審に覺えられるんだ。

一葉女史が二十四年の春から二十九年の夏までの日記を遺してゐることは、明治文學の知識のある人なら大抵知つてゐるだらうと思ふ。ところで、あの日記の全體の調子から考へて、あの日記にはわざ〳〵虛を書いてゐるやうなところはないと見なければならないんだが、あの日記に大體信を置くとすると、一葉女史が半井氏に師事した卽ち敎を乞うたのは、明治二十四年の四月の半ばから、二十五年の六月の半ば頃までのやうで、その後は友人等（そのなかには吾々ははひつてゐない）の忠告で半井氏とは交際を絕ち、その後は二十七年の春頃から二十九年へかけて僅に四五回ぐらゐ半井氏に會つたのみであることになつてゐる。勿論半井氏の世話で、女史の作品が『武藏野』や『改進新聞』へ出たのは、この交際斷絕以前のことである。これでは、常に半井氏の寓居を訪うて敎を乞うたとは云へないやうに思はれる。山崎氏の書かれたやうだと、一葉の作中の優れたものが皆半井氏の敎の下に書かれたといふやうに聞えさうなので、その點を明白にして置きたいと思ふ。少くとも明治二十七年の暮あたりから以後の一葉女史は誰の力をも借らずに獨力であれだけのものを書いたものと僕は信ずる。一葉女史の日記『みづの上日記』の六月二十日（二十九年）のところに左の記事がある。

『二十日の夜、更けて半井君來訪、いとめづらしき事よとおもふに、あわたゞしげの車にてさへ參られき、唐突に此のほど齋藤正太夫わがもとを訪ひ候ひき、御宅にまかり出たる由といふ。いかに

もこのほどよりおはしまし初ぬ。いと氣味わろき御かたよと笑へば、誠にさにこそ、いと氣味わろき男なればかまへて心ゆるし給ふな、我がもとに來たりて、君が身の上さま〴〵に問ひき、此のほどの世の取沙汰はかく〳〵しかじかこそいへなどいとおほくつゞけければ、左のみはわすれておもひ出でられず、知らせ給ふ如く我れはうき世の別物になりて、たゞみかん箱製造にのみ日をおくれば、文界の事など更にしり候はず、君がさばかり高名におはすなるをも、かれ絲雨より傳へ聞くまでは夢にもしらで過ぎ候ひき、御筆いたくあがり給へるのよしをかれはいひき、彼れは近々君の事を論じたる一文世に公にするのよし、材料もあらばととはれたれど、我れは更にしらぬ由をこたへぬ、我れと君との上につきてあやしき關係ありしやにいひしかば、こは心得ぬことといかでさる事のあるべき、世人はとまれ君などさへさる事をいふ、何なる心ぞやとなぢりしに、いな、君の事はすでに先口なり、こと舊聞に屬す、今更あなぐるべきにも非ずといひき、かくて何を書いで候らんと、いとおぼつかなげにいふ、我れはしば〳〵一葉をとふ、惡口の種さがしにともおぼし給ふらん、さりながらおもへば種さがしの爲めなりしかもしれずとかれはいひき、いと油斷のなりがたき男よと心づけらる。

萬朝報にて君のこと近々かゝばやと有しかば、同じくはとひきゝ參らせてあやまりなき處をかけかしと我れはいひおきぬ。かしこの社にて不似合のこと、君が事よく書くのよしとて笑ふ。

かたらまほしげの事多げにみえしが、何もふくめたるやうにて又もこそと歸る、いとめづらかなる人のまれ〳〵とひ寄りたる事なからずやはとかたぶかる』

此れで見ると、一葉の晩年は半井氏とは交際が殆どなかつたと思はざるを得ないではないか。それから、も少し前へ戻つて日記のなかの『しのぶぐさ』(二十八年一月)を見ると、

『三日の朝年禮にとてなから井のうし門までおはしぬ、何事もかさりをすてゝすがたもいたくおとろへ給ひき。

ますかゞみわれもとり出ん見し人はきのふとおもふにおもがはりせる

聞えし美男にて衣裳などいつもきらびやかなりし人なりけるを』

とある。これでも、此の時分には、一葉女史は半井氏とは會はなくなつてゐたことが推定できると思ふ。しかし一葉女史及びその親族が半井氏の當初の推輓を何時までも感謝してゐたことは事實である。

平田禿木、戸川秋骨、僕といふやうな『文學界』の連中が一葉女史と親しくなつたのは、女史が本郷の丸山福山町へ移居した二十七年の春以後のことであつて、その時分には、一葉女史と半井氏との交際は絶えて居たらしいのだから、山崎氏の文中にある左の項の事實が大分怪しくなつて來る。

一葉が度々君（半井氏のこと）の寓居をおとづれることによつて、孤蝶君や秋骨君などから色眼鏡をかけられるのがつらいと云つて、當分は私はお伺ひしない方がいゝでせうと眞顏になつて君に話したこともあつたさうだ。それ程一葉は純な女性であつた。

此れは僕等から見ると、半井氏の話を山崎氏が早飲み込みをして、時代の觀念などは少しもなく、僕等の名を此所へ引き合ひに出したに過ぎないものと思ふ。その時分を明治二十七、八年頃とすれば、一葉女史には少くとも『闇夜』『花ごもり』といふやうな辭句に可なり皮肉な調子の出てゐる作品のあつた時代である。あれほどもう考が大人びて來てゐた一葉女史が、僕等の名前まで擧げて、半井氏を度々訪問しがたい理由にする譯はないと思ふ。

一葉女史が半井氏と疎遠になつた事情に就ては一葉女史の日記に可なり詳細なる記述がある。『しのぶぐさ』（明治二十五年）の六月十四日から月末頃までのところを見れば、明白に書いてある。半井氏がその時分の話をしたのを、山崎氏が直接に聞いたか傳聞したかして、宜い加減にその事情の一部へ僕等のことをくつつけてしまつたのであらう。

『雪の散る夕、足袋もはかず、ぐる〳〵と櫛まきにした束ね髪で、一葉は君をおとづれたが……』

さう山崎氏は書いてゐるが、これは何だか不正確なことのやうに思ふ。雪の日に一葉女史が半井氏を訪うたことは、日記の二月四日（二十五年）のところに可なり長い記述がある。僕は何うもその方を信じたい。

それから、山崎氏は一葉女史が二十六で死んだと書いておいでだが、女史は明治五年の生れだから、歿年の二十九年には二十五であつた譯だ。山崎氏は一葉女史が今生きて居れば、六十二だと云つておいでだが、山崎氏の計算法は一寸合點が行き兼ねる。明治二十九年から今年昭和二年までは三十一年になると思ふ。一葉女史が今生きてゐれば五十六になるわけだ。從つて半井氏のなくなつた年が確に六十七だとするならば、一葉女史とは十二ちがうことになる。さうすると、一葉女史が半井氏を度々訪うた明治二十四、五年には、女が二十、二十一といふ齢で、半井氏の方は三十二、三十三といふ齢であつた筈だ。

一葉の文章はどこか垢抜けてゐて、殊に小説の構想や題材が當時のニキビ黨作家の及びもつかぬものであつた。例の綠雨なぞは、どうせ素人娘ではなく茶屋女の果かなぞであらうと思つてゐたら心中の氣持を研究に行く程眞面目な女かと跡で感心したといふ逸話もある位だ。この作者の筆から『にごりえ』のあの傳法肌の文句がにぢみ出たかと思ふと、誰しも一寸驚くに違ひない。

ひどく揚げ足を取ることになるが、山崎氏の此の記述も何うも首肯し兼ねる。一葉女史の文章がどこか垢抜けてゐたといふのは、女史の作の何時ごろのをいふのであらうか。二十六年以前の作者ではそれほど垢抜けてゐたとは云ひがたからうし、二十七年の終頃からの諸作ならば、どこかでなくして十分垢抜けがしてゐると云つてやつてもよかりさうにも思うんだが何んなものであらう。

次にニキビ黨作家といふのは當時のどういふ連中をさしたものなんであらう。その時分には、今日のやうに同人雜誌といふやうなもの〻殆どない時代であつて、當時の小説作家は、割合ひに筆がこなれてゐて、大抵皆商賣人になつてゐたと思ふし、年齢から云つても、さう年寄りはなかつたのだ。特にニキビ黨と云つて輕蔑すべき連中を記憶しない。山崎氏のこゝに云つておいでの綠雨に關する逸話なるものは、僕は聞いたことはない。一葉の文章を讀んで、綠雨が一葉女史を茶屋女の果てかなんぞと思つたらうとは一寸想像のできないことだ。一葉女史の文章は、最初の作『闇櫻』あたりを見てもかなり文字の素養のある人の作だとは誰にも分かることだらうと思ふ。當時のやうな女性の間に教育の行はれてゐなかつた時代に、茶屋女のなかなどからあれだけの文章の書ける婦人がでて來ようとは誰も思ふ氣づかひはない。まして、あれ程批評眼の鋭かつた綠雨が一葉女史の文章を見て、女史の身分に大凡誤まらざる推測を下し得なかつた筈がないと思ふ。知り合ひになるまでは、處女とは思はなかつたかも知れぬが、教養ある婦人とは思つてゐたらうと思ふ。

僕は一葉女史が半井氏の指導、推輓を受けたといふ話は、一葉女史の日記のことを綠雨から聞くまでは一向に知らなかつた。それを綠雨から聞いたのは、勿論女史歿後のことなんだが、綠雨が女史を知る前、女史のことを綠雨などは何ういふ風に聞いてゐたのかと、綠雨に尋ねてみたが、綠雨は、吾々は何だか半井の關係のある婦人だといふやうに聞いてゐたと答へた。唯それだけで、ほかには何も聞かなかつたが、心中の氣持を人に聞きに行くことが、それ程綠雨を感服させたか何うか、何だかこの邊も少しそのまゝには受取り兼ねることのやうに思ふ。由來逸話などといふものにはヨタがあり勝である。何うも山崎氏の擧げられた此の逸話には、少しも辛味(からみ)がない。關係者が綠雨であるだけこのまゝでは頂戴できにくいやうに思ふ。

次には、『にごりえ』の傳法肌の文句だが、一葉女史のそれまでの作を讀んだならそれ程意外には

思はないだらう。しかも、所謂る傳法肌の文句なるものは『にごりえ』の一部分にしきや過ぎない。女史の才筆ではあんなところぐらゐは、さう骨は折れなかつたらうと思ふ。

とにもかくにも、吾々が親しく見たり聞いたりして來た時代が今日の若い方々には全く見ぬ世のことになつてしまつたので當時の事柄に對しては、吾々とさういふ若い方々とは、餘程考を異にするのは已むを得ない。唯、吾々の方では、吾々の考をそのまゝ提出して、ご參考に供すればそれで宜しいと思ふ。贅言ある所以である。

『文學界』のこと

雜誌『文學界』に集まつてゐた五六人の者の思想なり作物なりがどういふものであつたか、それらの者共の爲人(ひとなり)がどういふものであつたかといふやうなことに就いては島崎藤村君の『春』といふ小說が殆んどそれを書き盡してゐる。その小說の中の靑木といふのが北村透谷であり、岸本といふのが島崎藤村君であり、市川といふのが平田禿木君であり、菅といふのが戸川秋骨君であり、岡見兄弟といふのが星野天知君と同夕影君であり、福富といふのが上田敏君であり、栗田といふのが大野酒竹であり、足立といふのが馬場孤蝶であるといふ風で、中に書いてある事實も先づ全部實際あつたことだと云つて宜からうと思はれる。さうして見ると、『文學界』のことを僕が玆で話すのは全く蛇足である譯になるのだが、然し、『春』の方は小說であるのだから、幾らか朧げなところもあるかも知れないと思ふので、玆には事實として話して見ようと思ふ。

ところで、『春』は御承知の通り印象的に書かれたものであるので、あの中に出て來る個人々々の行爲、思想といふやうなものに就いては、『春』の中で書かれなかつたことは大分あるのであつて、それを話せば當時の文學者の謂はゞ裏面的生活に對して好奇心を持つ人々のおなぐさみ丈けには確かになることだと思はれるけれども、これは玆ではやらない。何故それをやらないかといふと、實際の事實といふものは、樣々な人の利害に關係を有つて居るものであるから、それからしてまた、個人の私的生活といふものは何等か已むを得ざる理由あるにあらざれば他人から公にすべきものではないのであるから、それを藝術にでもするのでない限りは、この場合に於て公にすべきものでないと僕は考へるからであるのだ。

『文學界』の第一號（二十六年一月刊行）を僕が見たのは高知市に於てゞあつた。

僕は二十四年の暮に兩親を東京へ遣して置いて僕一人高知市の共立學校といふ英語專門の學校へ教師に行つて、二十五年の夏休みに東京へ歸つて、それから九月の末位に高知へ行つたのであるが、その夏休みの間は眼病に罹つてゐたので、島崎君にも戸川君にもさう度々は會はなかつたやうに思ふ。島崎君が巖本善治氏の『女學雜誌』の寄稿家でその時あつたことは知つてゐたが、別に島崎君の交友達に就いて聞いたことはなかつた。

ところで、『文學界』第一號は島崎君から僕の手許へ郵送されたか、それとも島崎君自身の手から受取つたかどちらであつたか今確かには覺えてゐない。

二十六年の一月の末か二月の初めであつたか、その時日の記憶は今確かでないが、教場に出てゐると小使が古藤庵無聲といふ名刺を持つて來て、かういふ人が會ひに來たと僕に言つた。僕は新聞社の人でも來たことかと思つて暫時待つてゐて貰ひたいと小使に言つた。で、それから少し經つて教場から出て來ようとしてゐると、小使がまたやつて來て、お客樣は甚くお急ぎのやうでございますといふのだ。そこで、一體どんな容子なのかと小使に訊くと、どうも旅をなすつてお出でになつたお方のやうでございますといふのだ。その瞬間に僕の心には、餘程親しい人が訪ねて來て吳れたのではなからうが、思ひもかけぬ人が來たのではなからうか、といふやうな豫覺が生じた。今思へばその時何となく島崎君の名が僕の心の中に微かに閃めいたやうに思ふのであるが、それは今の記憶なので當にならない。で、大急ぎで小使部屋へ行つて見ると、旅裝束の島崎君が居た。僕は豫期したことが當つたやうな感じと意外なことが起つたといふ感じとが妙に雜り合つた心持で島崎君を迎へた。が、島崎君に其處で會つたのは僕にとつては非常に嬉しかつた。高知は僕の故鄕である、然し乍ら幼年の時其處を去つた僕に取つては、高知の言葉を殆んど忘れてしまつたやうな僕に取つては、高知は全く旅先であ

つた。その遠國の旅先で親しい友に會つたのであるから僕は非常に嬉しかつた。僕はその時甥を東京から連れて行つてゐたので、それにいひつけて島崎君を僕の家へ案内させて、それから僕自身は學校の仕事をしまつてから家へ歸つて島崎君とゆつくり話をした。『文學界』のことや『春』の中にある岸本捨吉君の戀愛の話をきいたのはその時であつた。二十三年以後の島崎君は、非常に沈默な、非常に嚴格な人に見えた。それは島崎君の自己改造に努力せられた時代であつた。女のことなどを話し合つたことのそれ迄一度もなかつた島崎君の口から、戀愛の話を聞くのは僕に取つては甚く意外であつた。僕はその時は既に性慾上の或る經驗は有してゐたのであつたが、島崎君の話したやうな――卽ち『春』の中の岸本君のやつたやうな――戀愛をば十分に理解することができなかつた。同情はあつたが、所謂共鳴はなかつた。島崎君は僕の家には精々四五日位しか居なかつた。或る霧の降る日に高知の灣から船に乘つて歸つてしまつた。それから少し後になつて我々の親友某君が、某君自身の戀愛に對して島崎君の同情が足りないといふ不滿を島崎君に訴へた。すると島崎君は『それは誰しも有つ感情なのだ。現に高知の馬場の所へ訪ねて行つたときにも先方は非常に款待して呉れて心持がよかつたが、たゞ自分の戀愛に對しては馬場の同情や理解が足りないやうに思はれたので、たゞそれ丈けが自分には不足であつた。誰でも戀愛に熱中してゐるときには、他人の同情なり理解なりが足りないやうに思ふものだ』と答へたさうである。が、實際のところ僕は島崎君の戀愛に就いての話には面喰はされたやうな氣持であつた。異つた世界を近々と見せられたのであるが、僕はその世界の人であつたこともなく、又その世界へ突入しようといふ氣もなかつたので、僕の同情は熱中した戀人を慰めるに足りるものでは決してなかつたのだ。僕が島崎君の心持を理解し得る點まで近附き得たのは、それより後のことである。さうして見ると、島崎君は文學者として僕の先輩であると共に、さういふ人情の點に於ても確に僕の先輩であるのだ。

高知の鏡川の岸にあつた僕の家で、早い春の夜、島崎君は物靜かなしかし沈痛な聲で、島崎君自身の文學を本氣にやりだした心持や旅に出た考や自身の人生觀などを詳しく話した。

『春』を見ると、次のやうな靑木――北村透谷――の文章が引いてある。

『極めて拙劣なる生涯の中に、尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に、尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる內部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞摯なる靈劍を空際に擊つ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙る神の如し。天下斯くの如き英雄あり、爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざ

るを得ざる所なり』

これが北村透谷のみならず島崎君始め其他の文學界同人の考を最も雄辯に說明してゐると思ふ。

高知で島崎君から聞いた話や、其の他の諸君から聞いた話を綜合して見ると、『文學界』の起つた過程は大凡次のやうな風であつたらしい。巖本善治氏が出して居られた『女學雜誌』が次第に耶蘇教に緣故のある若い文學者の作物を發表する壇場になつて來たのは、明治二十五年頃である。ところでその年の秋頃からして『女學雜誌』に文藝附錄といふやうなものを附けることにして、そこへ『女學雜誌』關係の若い文學者に力を盡させようといふ話が出來た。が、巖本氏は宗教家であるのだから、文學者とは――殊に其の『文學界』同人になつたやうな人々とは――大分道德觀も違ふのであつたし、殊にさういふ文學者の連中には、もう既に耶蘇教に對する反對的態度を表明し出してゐた連中さへあつた位であつたのだから、そこで、雙方の爲めに『女學雜誌』とは一向關係のない雜誌を出す方がよからうといふことになつて、愈々二十六年の一月から『文學界』を出すことになつたのであつた、といふことだ。金は星野天知君が出し、編輯は星野夕影君がやることになつた。で、その時の執筆者は、北村透谷、星野天知、古藤庵無聲（島崎藤村）平田禿木といふやうな後來『文學界』の幹部になつた人々に、戸川殘花氏が謂はゞ特別寄稿家のやうな位置に加はつてゐたのであつたやうに記憶する。その時分、島崎君の書いたものは各行十七字になつてゐる戲曲若しくは抒情詩が主なもので、その外に芭蕉の俳文脈を大分取入れた散文が大分あつた。高知で島崎君に會つたときに、島崎君は『十七字にすると漢語が自由に使へるから、かういふ形を始めたのだ』と僕に說明して呉れたことのあるのを記憶する。

北村透谷は、『文學界』に加はらないうちから可成り作をしてゐたやうである。『蓬萊曲』といふ戲曲のやうなものが既に單行本になつて出てゐたと思ふ。僕が透谷を見た時分には、もの透谷の體が病的になり始めてゐた時分なのだと、何時か島崎君が云つたことがある。それはさうなのであらう、如何にも神經質らしい落着のない人のやうに思はれたのだ。年齡の割には世間的知識の狹い、考の偏つた人のやうに思はれた。妙に角の立つた人のやうな氣がしたのであつた。が、心の弱い人とは見えなかつた。野卑だといふやうなところは決してない人であつた。が、惜しいことに耶蘇教がそれ程ぬけ切つてゐなかつた。けれども、さういふ風に稍や一本調子に見えたところが或る仕事の――或る思想上の仕事の――開拓者としては必要な資格であるかも知れないのだ。

平田禿木君は、その時分はまだ二十一歲位であつたらうと思ふのだが、平田君は却々成熟してゐた。藝術上の技巧に對する鑑賞力の精到なる人であり、一體に趣味の豐富な人であるのは勿論、人情

に對する知識及び考察力が年齢の割には餘程多かつた。今日の平田君は如何にも控目な人になつてしまつて、今は殆んど隱遁的生活を送つてゐるやうな有樣である。けれども、二十六七年の頃の平田君は筆に於ても口に於ても却々の論客であり、警句家であつた。平田君の紅葉露伴兩氏の作物に對する批評などは却々氣の利いた粋な文章であつて、紅葉が書を寄せて平田君に或る作物の批評を賴んで來たことがある。『春』を見ると、『市川といふ男は西洋料理を食つて反吐を吐いたやうだ――かういふ有難い批評をある大家から頂戴したといつて市川は反りかへつて笑つて……』と書いてあるのだが僕が、誰からか聞いた話では、紅葉が『文學界』の連中は西洋料理と日本料理を一緒に食つて反吐を吐いたやうなものだと云つたといふのである。成程これは當つて居る批評であらう。ところで平田君の所謂反吐は、西洋料理と日本料理が可成り融合してゐたのであるが、島崎君等始め僕等に至る迄もの反吐はその二つの料理が生のまゝで出てゐた趣が確かにあつたらうと思ふ。

『文學界』の創立者達のことに就いては先づそれ丈けにして置いて、その人々の志といふ樣なものを說明する事を試みよう。

『文學界』の創立者等は、兎に角孰れかの耶蘇教の教會に籍を置いた人々である。その當時の耶蘇教なるものは可成り新知識の進步主義の人々を集めてゐた。が、しかし、さういふ人々の中心思想は、東西の舊い道德から何程も脫出してゐるのではなかつた。『文學界』の創立者等の志は、さういふ舊い道德から自分等の思想を解放しようといふのに在つた。『文學界』の創立者等の間には『繩墨を脫する』といふ言葉が行はれた。卽ち舊い羈絆を脫する、卽ち習俗を脫するといふ意味だと解して宜からう。

前に引用した透谷の文章の中からも窺ひ得られるが如く、『文學界』の創立者等の志は所謂凡人の思想行爲、卽ち凡人の生活の尊重に在つた。凡人の存在の意義、凡人の尊嚴を主張するに在つた。

『文學界』創立者等の當時文界に對する態度は――其當時の思想界に對する態度は、その當時文界の權威を成してゐたところの硯友社派及び民友社派の文學に對する反逆の態度であつた。謂はば物質主義に對する精神主義の反抗であつた。洗煉に對する野性の反抗であつた。文界の紳士に對する文界の書生の反抗であつたのだ。言葉を換へて云へば、理知主義に對する感情主義の反抗、客觀主義に對する主觀主義の反抗であつたのだ。

『文學界』の同人は自分等の失戀のことを平氣で書いた。尤もその點では僕と戸川君とが一番罪が深かつたかも知れないが、他の諸君もその點で全然無罪だとは言へなからう。ところで、二十八年頃だと思ふのだが、川上眉山が、尾崎紅葉が『文學界の連中は戀の失敗のことを殆んど誇りがに書いて居

るのだが、あれは並の人ならば隱すのが本當であるのに、どうしてあゝいふ風に露骨に書くのであらう。あの連中の心持がどうも解らない』と云つてゐるといふことを僕に話したことがある。『文學界』の連中が露骨に自分等の失戀を告白したのは、前に言つた通りの平凡生活の尊重、客觀主義に對する主觀主義の反抗、洗煉に對する野性の反抗、といふやうな所に根據を有してゐたのだと思ふ。『英雄畢竟馬前の塵である。つはもの共の夢の跡は夏草である。羅馬の城壁は跡なく崩れてしまつた。英雄の事業に何の永遠があらう。戀を索め天地の美を探る凡人の心の方が、遙に永遠であり、意義がある』と、島崎君が高知で僕に話したことがあるやうに思ふ。

『文學界』の同人等は當時の思想界の現狀、當時の文界の現狀にはあきたらなかつた。で、彼等はその現狀から脫却しようとした事は前に言つた通りであるが、其脫却しようと思つた當人が矢張り彼等自身の裡に舊い多くのものを有つて居つた。なほその上に、殘念なる哉、彼等は自然主義の開拓者等の如き良い師表を有つてゐなかつた。『ハムレット』と『若きエルテルのわづらひ』とではさう遠くまで行けないことは知れ切つてゐる。彼等は人生にロオマンスを索めた。卽ち彼等の向つた方向は間違つてはゐなかつた。が、到着點を確かに睨んでゐたのではなかつた。『文學界』の創立者等及び『文學界』に可成り關係を有つてゐた人々の中で、出發點から到着點まで少しも疲れずに來た人が二人ある。それは島崎藤村君と田山花袋君である。

ところで、一口に云へば、『文學界』の同人といふことになるのであるが、勿論個人々々に就いて言ふと色々異つたところがあるのは勿論のことである。けれども、玆に極大まかな類別を示してみたいと思ふ。明治四十二三年頃かと思ふのだが、島崎君の淺草新片町の家で、『馬場君とは生れた階級が違ふので、色々相違があるやうに思ふ。馬場君等は上流の階級から出、僕等は下流の階級から出たのでそこに色々面白い相違があると思ふ』といふやうなことを島崎君が僕に言つたやうに覺えてゐる。この大類別法に從つてみると、一寸と面白いことを發見する。卽ち北村透谷、戸川秋骨の兩君へ更に僕を加へ、それを一方に立たせ、島崎藤村君と平田禿木君とを他方に立たせて見るといふと、一方の人々は考が抽象的であり、趣味も粗大であり、萬事大摑みな人々であるが、他方の兩君はそれとはまるで反對で、思想も緻密であり、趣味もこまかく、萬事に精到してゐる。前者は謂はば豫言者肌であるが、後者は何處までも藝術家肌である。北村透谷は行きつまつて斃れたのであるが、性格に於て似寄つた多くを有つてゐたと云はるゝ島崎藤村君は、非常な努力によつて行くべき道を自ら開拓した。これは、この兩君の性情の差にも基くことであらうが、上に言つたやうな類別もその原因を爲してゐないわけはなからうと思はれる。

そこで、その次に來る問題は、『文學界』の創立者等の爲し遂げたところのものが、どういふ影響を、その後の思想界及び文學に及ぼしたかといふ問題であるのだが、これは最も手取早くいふとよく分らないといふより外はない。『文學界』の廢刊したのは明治三十年の十二月であるのだが、雜誌はそれ以前よりもその以後に於て弘く讀まれたと信ずべき理由がある。さうして見ると、尠くともその時分の文界には多少の影響を與へたには違ひなからうが、その代り『文學界』の連中それ自身が、明治二十七八年頃の思想界及び文界から樣々の影響をうけたことは事實であるし、また彼等の出現はその時分の青年の間に勃興しかけてゐた思想の大勢に推されたものと見るのが至當である。即ち彼等の出現は『時の徵』であつたのだ。で、その後から起つた思想界並びに文界の樣々の運動に『文學界』の出現それ自體がどれ程の貢獻をしたのであるか、これを定めることは全く不可能である。が、『文學界』同人中の個人々々になると、それは大分異つた話になつて來ると思ふ。吾々は北村透谷、島崎藤村、田山花袋の三君の如きその人の思想、文體技巧等がその後に來れる若き人々の藝術に樣々な直接な影響を與へた人々に敬意を表すべきであらうと思ふ。言ひ度いことは盡きないがこの話は先づこの邊で打切る。そこで、斷つて置くが、この話の中で故人には大抵『君』といふ敬稱をつけなかつた。これはその人々を輕蔑した譯では決してない。たゞかういふ場合の先例に從つたまでである。

それから『文學界』同人のことに就いては、島崎藤村の『春』が最も良い說明書である。『文學界』同人のことを知らうと思はれる人々は『春』を精讀せられんことを希望する。

14359

明治文壇の人々

昭和二十三年六月十日　印刷
昭和二十三年六月十五日　發行

定價　180圓

著者　馬場孤蝶

東京都中央區京橋二ノ二千代田生命ビル
發行者　築井健人

東京都千代田區神田二丁目
印刷所　文化印刷株式會社

發行所　東京都中央區京橋二ノ二千代田生命ビル
株式會社　東西出版社
電話京橋(55)七七一〇—一
會員番號A二二〇〇八九

▽東西出版社　既刊△
各冊 〒10圓

森田草平著
漱石の文學
B6　三六二頁
定價　七十五圓

森田草平著
漱石先生と私
上卷　B6　四九四頁
定價　百五十圓
下卷　B6　二八二頁
定價　百　圓

田部重治著
青葉の旅・落葉の旅
B6　二五〇頁
定價　九十五圓

田部重治著
山と溪谷（紀行篇）
B6　三一〇頁
定價　百三十圓

豐田正子序・大木顯一郎著
綴方教室
B6　二三〇頁
定價　七十五圓

~~912.5~~
~~B12~~
910.26
B12
ウ

終